

エゾマツ



Y.K

2007年春季号 80

北海道ボランティア・レンジャー協議会

目 次

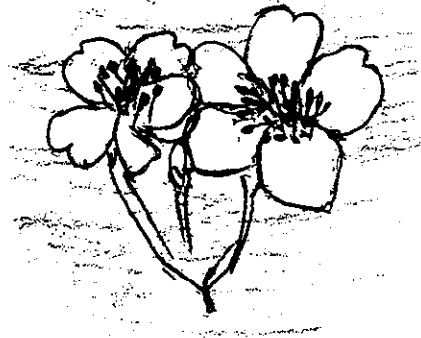
主張	地球温暖化……私たちにできること……	会長	田村允郁
1	ネイチャーウォッチングクラブ	伊達市	木村益巳
2	平取町のイグサ科とカヤツグサの植物について	平取町	川村桂介
3	近況 …… 春二題 ……	剣淵町	梅坪利光
4	私の積丹岳	積丹町	佐藤久美子
5	クモガタガガンボのこと	苫小牧市	谷口勇五郎

<連載>

6	天塩川 “百年の流れ” 追って	札幌市	小泉三雄
7	野幌森林公園を知る (2)	札幌市	室野文雄
8	記紀の中の植物 (面白い話)	札幌市	成田伸一
9	ユケを訪ねて	札幌市	吉田政徳

<本の紹介 役員会、連絡など>

10	岩崎元郎著「新百名山」	広報部
11	地図 藻岩山	室野さん作成
12	会の継続と発展を願って	事務局長 春日順雄
13	自然観察 NOW	
14	第4回 役員会レジメ	
15	小樽支部観察会 (2006年参加者集計)	
16	小樽支部自然観察会予定表	
	編集後記	



〔主 張〕

地球温暖化-私たちにできること-

会 長 田 村 允 郁

先日映画を見る機会がありました。ここ数年映画館に足を運んだことがなかったのですが、是非見ておきたかった映画だったからです。題名は「不都合な真実」といい、書店には同名の書籍も並べられています。

地球温暖化の指摘がされていながら、世界的規模での対策が遅々として進まぬなか、地球環境が加速度的に悪化している状況に、私たち個々人に何ができてどのような行動が必要なのかを訴える、そんな映画だったのです。

映画「不都合な真実」は前米国副大統領アル・ゴア氏が地球環境問題とりわけ深刻さを増している地球温暖化について、各種の資料を駆使して講演しているドキュメント映像です。映画を見たり書籍を手に入れた方もいることでしょう。アル・ゴア氏は米国ブッシュ現大統領と大統領の椅子を争い、僅差の票の集計で破れました。アル・ゴア氏が大統領になっていたら、イラク状況も変わったものとなっていたことでしょう。

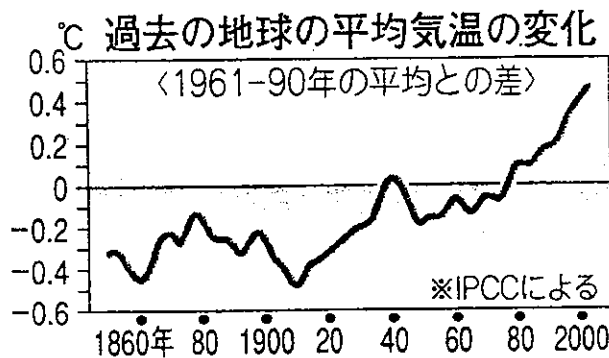
地球上に今65億人が住んでいて、生活の営みによって環境破壊が急速に進んでいます。その結果が地球の温暖化であり大気中の二酸化炭素濃度に集約されています。二酸化炭素濃度は氷河期以降ほとんど変わりませんでした。産業革命以降上昇し始め、かつての1.35倍にもなりました。石油・石炭など化石燃料を使うため、今世紀末には1990年に比べ、平均気温が6.4度上昇するといわれています。気温上昇にともなう深刻な状況についてはさまざまなニュースが流れています。北極の氷が薄くなった、アフリカのキリマンジャロの雪が解けた、大型ハリケーンが次々とアメリカを襲った、世界で6番目に大きかったアフリカのチャド湖がほぼ姿を消した、カザフスタンのアラル海が実質的になくなった、海面上昇に伴い太平洋の海拔の低い島国に住む人々はすでに家から避難している、等々についてはもはや無関心ではいられないことになっています。これらの原因が二酸化炭素の増加にあるということは世界中の多くの学者が指摘していますが、その危機感を私たちがあまり感じていないのが現状で、毎年少しずつ増えてはいるが特に心配していないという認識でしかありません。

映画の中でこの事態をつぎのような例で話を進めていました。「沸騰しているお湯にカエルが跳びこむと、カエルはその瞬間ぴよんとお湯から跳び出しま

す。本能的に危険を察知しているからです。しかし、そのカエルを生温かい水の入った鍋にいて、少しずつ温度を上げ沸騰させると、カエルはただじっとしているだけで、危険を回避しないのです」。この例え話はまさに的を得たものです。私たちは地球温暖化がじわじわ迫っていることに目を背け鈍感になっていると言えないでしょうか。このまま放置しておく、本当に鍋のお湯が泡だちはじめ沸騰しはじめてしまいます。

今年1月、地球温暖化に関する世界の研究者でつくる「気候変動に関する政府間パネル」(IPCC)で報告書をまとめました。世界130ヶ国2500人の研究者によって組織されているこの報告書にはショッキングな報告がなされています。それによりますと、地球温暖化は人為的なものである確率が90%より高く、その原因の多くが石油石炭の化石エネルギーに依存していることにあり、このまま続くと今世紀末には1990年比で気温が2.4~6.4℃上昇する可能性があります。気温上昇に伴って北極の晩夏の海水は21世紀までにほとんど消えてしまい、海面上昇は18~59cmにおよぶと報告書に述べられています。また、気象異常も頻発し、極端な暑さや熱波、豪雨などの発生頻度が頻繁になり続ける可能性が高いとも述べられています。

このように地球温暖化は他人事のはなしではなく、まったなしの対策と行動が求められています。私たちにできることは何かを真剣に考えなくてはならない時が来ています。ボラレンの研修や観察会活動でも自然環境保全と地球温暖化の関係について積極的に取り上げていく必要があると思うのです。



伊達市の自然観察会「ネイチャーウォッチングクラブ」

木村 益巳(上会長)

まず、伊達市のご紹介です。胆振の室蘭市と洞爺湖との間、噴火湾沿いにある3万7千名程度のまちです。冬あたたかく夏涼しく北海道の湘南といわれています。あちこちで柿がたわわに実をつけているのを目にします。

さて、ネイチャーウォッチングクラブ(NWC)は、「自然に親しみ・学び・自然をまもろう」という目的で活動し10年になりました。近年は主に、夏場は野外での自然観察会7回程度。リースづくりなど。冬場5ヶ月は「冬の自然勉強会(後援)」5回。そして、会報がカラーで年8~9回・+αを発行しています。10頁~14頁程度です。

「ゆるやかなあつまり」の会で、個人の都合に合わせ、「出たいとき、出られるときにどうぞ」というのがモットーです。ですから、皆勤賞に近い人から全くの読書?会員までがいます。観察会には平均20数名の参加でしょうか。中でも1日バス旅行(観察会)は多くの会員が楽しみにしています。ここ数年、会員約70名+家族会員約20名が定着しています。ちなみに、会費は年3000円(家族会員は年100円)です。多くの予算がカラー会報発行に費やされます。観察会で車に同乗する場合市内400円、市外800円~を運転者に支払うこととしています。マイカー提供を含め、当たり前かもしれませんがスポンサー無しの自前の活動です。

ご多分に漏れず?シルバー世代が多い会です。でもこの世代は時間も元気もあります。会社などのシガラミがなく自由です。

会では、「自然豊かで・自然を生かしたまちづくり」を呼びかけています。そのようななかで、自然関係の活動も広がりを見せています。伊達市内の北黄金貝塚遺跡公園での「縄文の森づくり(8年)」や開拓記念館での「野草園+ビオトープづくり(3年)」の市民ボランティア(市噴火湾文化研究所が事務局)にもNWCから、代表や世話人を含め、多くのNWC会員が参加しています。この活動では、市とは充分な話し合いが行われ、市民の考えが反映され(場所的制限有)、市担当者と市民と一緒に、手弁当で植樹・野草などの種蒔き植栽などを行っています。参加者は、年々その形が見えてきて、自分達でまちづくりの一端を担う楽しさを感じているようです。

自然系(一部文化系)の活動を行っている人が、それぞれの活動の情報交換の場(サロンの集まり)を持った事から発展し、まちづくりの提案を行っているのが、森と水と人ネットワークです。ここにもNWC会員が参加しています。野鳥の宝庫長流川(約250種天然記念物マガン・コクガン・オオワシ・オジロワシなど)の自然公園化の提案(2年前)・有珠地区の自然を生かしたまちづくりへの提案などが行われています。

カタクリ山笹刈り終了 2006/11/3

天候もまずまず、いつものようにカルチャーから乗り合いで出発。北黄金貝塚を経由し、気仙川を遡り現地へ。紅葉の時期に重なり川沿いのモミジも鮮やかに色づいていました。雑木林の斜面の下から上へ笹を刈っていきます。今まで笹に覆われていたところから落ち葉やいろいろな実、丈の低いナニワズ(沈丁花の仲間)、次の世代を担ういろいろな種類の幼木などが見えてきました。お茶タイムではたくさんの会員さんが差し入れをしてくれ、周りの紅葉を見ながらの休憩も楽しいものでした。感謝。今年で3年目の会の行事ですが、会員さんの中には個人的に笹刈をやってくれている方もいてずいぶん笹の無いところが増えました。カタクリの群落に加えてシラネアオイもたくさんあることがこれからがわかり楽しみです。ヒトリシズカやフタリシズカなどもあります。来春にはまた見に行きましょう。今年は25名、少し参加が増えました。ありがたいことです。(NWC日よりN○81)

感動と偶然の再会

2004/5/14

会員 S

前日の雨空から一転、朝から青空が広がり新冠判官館森林公園へのバスツアー、どんな花達に会えるだろうと嬉しさと期待一杯で出発しました。

すばらしい公園があるとも知らず、観光で何度も通った国道235号線、予定通りの時刻に到着。大下さんの心のこもった説明を聞き早速公園内へ案内され二度目の感動。

オオバナノエンレイソウの群落、思っていたより花は大きくどちらを見ても「私が一番よ」と美を争っているかのように、美しく咲いている。吸い込まれるように林の中を前に進むと、ニリンソウの群落。クマガイソウとベニバナヤマシャクヤクは絶滅草、黄色のキジムシロ、ツクパネソウ、サンカヨウ、ヤマハタザオ、まだ花が咲いていないオドリコソウ、歩く足元にはマイヅルソウ、等々、これらの沢山のヤマの花が、どこにでも、そして自由に、芽を出し生長するのを、邪魔しないように、私達人間が、歩かせていただくかのように誘導している遊歩道の自然な優しい造り、楽しくゆっくり見ることができました。この自然を、今まで、現在も、そしてこれからも守ってくださる方達に、感謝して又、羨ましい気持ちで花達と別れました。(NWC日よりN○59)

わたしたち市民自然観察会の会報から2つほど紹介させて頂きました。

ところで、「くろまつ」がより魅力あるものになるために、お願いしたいことがあります。写真・絵を鮮明に印刷する事を考えて頂けないでしょうか。文字とともに「絵・写真が訴える力」には大きなものがあると思うからです。(また、Eメールで原稿を送ることが出来ると大変便利です) 無理難題かも知れませんが、お許しください。

クモガタガガンボのこと

苫小牧市 谷口勇五郎

大晦日のお昼前、天気もいいし、コミセンは休みなので、長いコースの散歩に出ました。地球温暖化のためか、暮れなのに暖かい日が続いて、前日にほんの少し雪が降ったくらいでした。そのコースは4 Km程で、10日振くらいでした。豊木川(近くの小川)に沿って、大きなパークゴルフ場(時季には賑わっていますが、この日は休み)を見ながら、ゴミ焼却場の少し手前で右に折れ、坂を登り、火山灰を採取した荒れ地の縁を回り豊川小学校の裏山に出るルートです。



若い頃はジョギングでしたが、定年3年後くらいから散歩に変え、周りを見ながら、考えごとをしたり、全く自由で楽しい時間です。

裏山に入り、ミズナラやヤマグワの生えている山道を歩いていると、日がよく当らず1~2 cm残った雪の上を褐色のクモがゆっくり歩いていました。雪上にクモとは、3月頃になると、よくあることと思いながら。しかし、さてよ、雪虫(①雪の降る前に現れるアブラムシの仲間、②早春雪上に現れる各種の昆虫の2つの意味があり、②の方)ではと思ひ、しゃがんで、足を数えると、6本あります。(クモの足は8本)。サンプルピンを持っていなかったの、手の中に入れて帰りました。

実体顕微鏡で見ると、体長4.5 mm、羽はなく、太い足、背中に1対の黄色いしづく状のものがついています。これは平均棍(こん;ハエ目で後羽の退化したもの)かなと思ひました。触角はカに似るけれども、根元の2~3節が太いのでガガンボの仲間と思ひました。M氏(胆振で自然情報を発信している方)が書いていたのを思ひだし、探すと、クモガタガガンボとあります。しかし、困ったことに、腹端がかなり尖っている写真です。手元にいるのは、ごろっと丸く、先端に1対の突起があります。「札幌の昆虫」を見ると、やっぱり、お尻は尖って長いのです。保育社や北隆館の図鑑には載っていません。ついに、「北海道の昆虫」に♂♀両方の写真があり、クモに似た氷河性昆虫で生活適温は+2℃~-2℃で、-5℃では活動不能になり、夏の生態は分かっていないなどとありました。

これはクモガタガガンボ(ハエ目ガガンボ科)の♂で、当日は+1℃で、雪上を一匹だけで歩いていました。②の雪虫になります。枯れ葉や雪のない地表に居れば目立たず、分からなかったでしょう。裏山は昨年最後の勉強をさせてくれました。今年になって、同じコースで、別々の日、別の場所で、♂と♀を一匹ずつ見ました。下手なスケッチですが、実物の5倍の大きさです。

平取町のイグサ科とカヤツリグサ科の植物について

日高管内 平取町 川村 桂介

昨年度（06年）は、今まで後回しにしていたあまり興味をもって調べてこなかったイグサ科やカヤツリグサ科の植物について調査することにした。

平取町には、純然たる湿原や湿地はないので、田んぼの畦溝や休耕田、川岸や川に流れ込む小沢、ダムや溜め池などの縁やその周辺を主に調べてみることにした。そして、林の中や丘陵地や農道で見つけたものなどを含め最終的にはいぐさ科11種、かやつりぐさ科35種を同定することができた。

実は、これらの植物については、いたってポピュラーなヒゴクサやイグサやクサイを識別するぐらいの知識しかなかった。それで、採集してきたものをいざ図鑑で調べようとしても写真や図版が殆ど同じに見えて、様形から見当を付けるのにも感わされ非常に時間がかかった。また図鑑に記述されている用語で意味の分からない単語が多々出てきた。例えばタチコウガイゼキショウでは、茎葉は円筒状で「単管質」、「隔壁」はごく明瞭。また、コウガイゼキショウでは、茎葉は「多管質」とあった。多管質、単管質、隔壁などの用語については何のことか分からないままではあったが、他の記述されている特徴（苞や花被片の形状、雄ずいの葯や花糸の長さ、さく果などの形や大きさ、色など）を一つひとつ標本と照らし合わせながら検索をしていった。

作った標本を数多く見ているうちに、たまたまコウガイゼキショウの茎葉がちぎれていて、その切れ口がサトイモの茎のような格子状になっているものに出くわしたのである。「あっ、これがひょっとして多管質と云っていることでは・・・それでは・・・」とはやる思いを抑えながらタチコウガイゼキショウやハリコウガイゼキショウの茎葉を削り取って見たのであるが、思惑通りその切り口は格子状の切り口ではなくネギの茎葉のようないわゆる穴が一つの「単管質」になっていたのである。

また、タチコウガイゼキショウの標本にしたものを見た時、採集してきたばかりの生のものにはなかった竹の節のような線が、なんと茎葉にはっきりと現れていた。「なるほど、これが隔壁のことなんだな」とうなずけたのである。

このほかにも用語の分からないものがいっぱいあったが、じっくり標本と図鑑の記述を根気よく照らし合わせながら確認していくうちに、自然とその用語の意味するところが分かってくるのであった。

こうして自分にはほとんど未知の分野の植物の検索に取り組んでみたが、最初の5種ぐらいを同定するまでは時間もかかり非常に大変だった。けれどその

後は用語の意味するところも次から次と分かり、少し余裕が出てきて楽しく検索していくことができた。同定できた時の喜びは何事にもましていいものである。イネ科の植物を検索するときもそうであるが、カヤツリグサ科やイグサ科の植物も最終的に同定するにあたっては小穂を分解して花や果胞の形や長さや色などを確かめなければならない。その時頼りになるのが何ととっても双眼実体顕微鏡である。分解する時、普通のルーペでは片手しか使えないが、双眼実体では両手が自由になる。また、双眼実体を覗いていると、いつも時間が経つのも忘れるぐらい夢中になる。それぐらい顕微鏡で覗く世界は美しい。私にとって双眼実体顕微鏡は、このようになくってはならない大切な友達でもある。

今回の調査で採集した植物は下記のとおりである。家から比較的近いところしか調査できなかったが、思っていたより多くの植物に出会うことができた。

< いぐさ科 >

スズメノヤリ、イ、ヒメコウガイゼキショウ、ヤマスズメノヒエ、クサイヌカボシソウ、コウガイゼキショウ、ヒロハノコウガイゼキショウ、タチコウガイゼキショウ、ハリコウガイゼキショウ、アオコウガイゼキショウ

< かやつりぐさ科 >

ヒゴクサ、カサスゲ、オオカサスゲ、サドスゲ、ヤガミスゲ、アオスゲ、オオカワズスゲ、ヒメシラスゲ、ヒカゲハリスゲ、シズイ、エナシヒゴクサ、ヒメカンスゲ、ピロードスゲ、シラコスゲ、クロヌマハリイ、オオヌマハリイ、タガネソウ、ジョウロウスゲ、マツバイ・ハリイ、ホタルイ、エゾハリイ、ヒカゲスゲ、アブラガヤ、クロアブラガヤ、イトヒキスゲ、サンカクイ、タマガヤツリ、チャガヤツリ、カワラスガナ、ヒメクグ、ウシクグ、フトイ、イトアオスゲ、カワラスゲ

図鑑によると、イトヒキスゲとイトアオスゲについては北海道では稀にしか自生していない珍しい植物のようである。

今回は、いぐさ科、かやつりぐさ科以外でもいくらか収穫があった。オオアカネの株を5～6株見つけたことである。ほとんどが公園の林の中にあるので下草刈りの時刈り取られたが、2株が無事に花を咲かせたので嬉しかった。

もう一つは、教員をして日高管内7町を転勤して回ったが、アリノトウグサとエゾノカワジサを今回この平取町で初めて見る事ができた。また、エゾイヌゴマ、ヤマクルマバナ、ケナシシラオイハコベなども結構多いようである。

上記の植物(いぐさ科、かやつりぐさ科)については、見立て違いがないか作った標本を高橋 誼先生に確認していただいたものである。

近況 — 春二題

劍淵町 梅坪 利光

風倒木の掃除屋 — 薪山の日々

3月、このところは毎日、薪山に入って山仕事（山子）をしている。山には、一昨年台風で被害をうけ、いささかの根を持ってまだ命を繋いでいる風倒木がある。この2、3日は、直径1尺5寸ほどある樺をドンコロ状にチェーンソーで切断し、それを山腹の急勾配を利用して藪出し作業をしている。

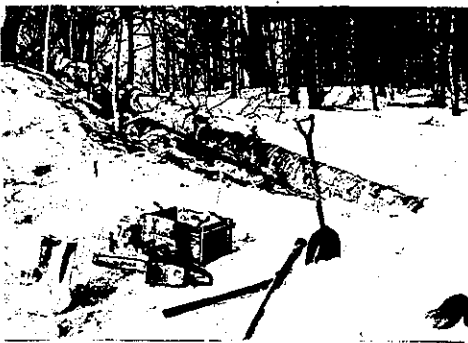
先日、藪出し用の櫓を作ってそれにドンコロを積んで三度薪山を下った。期待に反して積んだ荷を固定しきれないという不具合が生じたので、櫓を諦めて昨冬と同様に手齋一丁でドンコロを転がして（写真）、麓の土場まで移動している。土場まで200メートルはある。

薪は、冬期間別棟の小屋で焚いているが、今までの焚き方をすれば有に10年分は確保できている。今年は、それに2年ないし3年分が上積みされる。

山仕事は、10代に4年間経験しているので、山仕事に使うがんだ・とび・まさかり・くさびはお手の物とっていい。チェーンソーは使い始めて3年目になる。研いで切れ味を維持できるようになっているので、使いこなしていると思っている。この春も、山仕事は山肌の地面が見えるようになる前日まで続くであろう。

楔打つ木霊波して芽吹きかな

山を後にする日には、雪を割って陽光を浴びんとする樹下山草の息吹がある。楽しみしている。



樺の幹、薪に



山頂より「とび」で藪出し

春楡（ハルニレ）との共振

薪小屋は沢底から高さ 15~16 尋程ある沢の縁の平坦地に建っている。そこから縁に沿って数間離れたところに樹齢 60~70 年と思われる楡の木が一本ある。

小生がこの地に入ったのは今から 7 年前の春である。当時 3 年間は農園造成に遁走していたせいもあり、楡は周囲一带の景色の中の本一の樹木にすぎなかった。

4 年目、縁一帯のジャーマンアイリスを管理中に、一時作業の手を休めると、三間先に楡の樹のあることをいつになく強く意識した。楡の周囲は笹が生い茂っていた。早速、刈払機で笹を刈り払った。それから毎年 3、4 回下刈りを続けてきた。その間、時には幹の木肌に触れてきた。ある時には、幹に手を回したり耳を当てたこともあった。

いつのことであろうか、多分、一昨年の春だったと思う。座禅（我流）中に楡が心象風景に時々現れるようになった。それには根拠と経緯（いきさつ）がある。

動物はもとより植物も人間の『はたらきかけ』に対してそれなりに、何かしかの反応をするということは当然ありうることである。しかし、小生は実体験に甚だ乏しい。

そこで、この春から、互いの共振を願って、日に一度、楡との語り合いと触れあいをすることにした。

アカダモや五蘊皆空おらが春

齢 69 歳、ここしばらくのたのしとしよう。

淵と瀬と定めにかかせ笹船は 行方も知らぬわが身なるかな



樺の台風被害、その後に
直径 4 m 程の屋根

私の積丹岳

積丹町 佐藤 久美子

昨夜の強い南風が雪溶けを早め藤の木の回りで芽吹いていた。福寿草が日差しを浴びていっきに花を開きました。鮮やかな黄色の花々が春の訪ずれを感じさせてくれます。

朝一番、廊下の窓から積丹岳を眺めるのが日課になっており、今日はきれに見える、今日は全然見えないと思いながら一日が始まります。きれいに見える日は一日中天気の良い事が多いです。

今から、35年前に初めて積丹岳に登りました。その後結婚して積丹町に住み、又積丹山岳愛好会の一員として積丹岳とかかわり、今では私の一番大好きな山です。

先日、この大好きな山で、雪崩が起きて4人の方が亡くなり1人が重傷という痛ましい事故がありました。当日の昼頃、私は国道を通っていて、スノーモービル等を積んで来たトラック等を見ており、今日も山に入っているだなあと感じていました。テレビのニュースで事故を知りびっくり、あわてて外に出て山を見上げましたが、全然見えませんでした。

私自身、冬や春の季節に何度も山岳愛好会の仲間と山に入る事があります。青空のもとニセコ連峰や羊蹄山をはじめ山々が銀色に輝く景色に目をみはり感動し、又ある時は海の向こうに増毛の山々がはっきりと見え、それはそれはすばらしい景色に見とれたものです。

又いつか来れたと思いながらいつも山を降りました。こんな素敵で、死傷者を出した事故は私にとってとても残念でなりません。

私が所属する積丹山岳愛好会の会長さんをはじめ会員の方々は山のことをとてもよく知っており、天候についてもよく考えて実施しているので安心していろいろな山行に参加し楽しむことができました。

山に入る皆さんは、今回の事故を教訓にして山の恐ろしさを知っていただき、今まで以上に注意していただきたいと思います。

私の一番大好きな山、積丹岳で2度と事故を起きませんように。

天塩川 百年の流れ 遡って

—— 先駆者松浦判官の日記をたどる② ——

札幌市東区 小泉 三雄

武四郎宿营地での一夜

天塩川をさかのぼって道北内陸部を調査した際、宿営したとされる場所が美深恩根内にあり「松浦武四郎探険宿営之地」の標柱が建つ、唯一の手がかりである武四郎の残した文献「天塩日記」に基づき確認されている。

1857年(安政4年)6月12日オクルマトマナイ

(美深町小車、旧名尾車苦内)左川に宿す、今日の道凡7里、人家一軒エカシテカニ(家族12人)は貧しげで、屋根はフキの葉目も当てられぬような有様、家に入るとタイキ(のみ)がゴマをふりかけたように飛びついてきたのを子供たちが柳の皮をはいで来て、私の座るところに敷いてくれる、非常にかわいらしい子供だ



(3女、5、6男)やがて母が7、8男に草の根などを背負わせ、自分はたき木を背負って帰って来た。私たちに、今掘ってきたトゥレブ(オオウバユリ)の団子をつくりプシニ(ホオノキ)の葉で箱型の容器を作ってそれに盛って出してくれた。その食器の作り方や形が面白いので貰って帰った、ある人に見せると「これぞ古い葉手(ひで)葉碗(くぼ)などの類と同じようなもので本土では後世まで祭具に用いられていた」という、ここで古い風習が今も遺っているのも不思議なことである。この辺のアイヌは普通このように木の葉で食物を盛る食器を作って使用しているということである。トゥレブの団子をご馳走になったので私も今夜は沢山の「かゆ」を煮て、この家の子供たちにふるまった。

夜になるとこの家の妻は炉に青葉をたいて蚊遣りにしてトンコリ(五弦)を弾いてくれたが、その音色はいかにも奥床しく、雅びである。「琴唄は無いか」とたずねてみると「昔はあったらしいが、今は忘れられて曲だけが残っている」という。もう一曲チカフノホウ(鳥音)という曲をかなでてくれたが、春に沢山の小鳥の囀るのを模した曲で、本当に小鳥の声を聞くような心地にさせられた。(06年9月24日トンコリの演奏を聴く)

この夜武四郎は

「かきならず五の弦ごと音さえて千々の思いを我も曳けり」 トンコリ
という一首をものにしてる。日記に和歌がときおり書きとめられている。



小舟に乗り出発（三日間で河口へ）

1967年（昭和42年）7月28日ゆかりの地美深町恩根内を出発。

午前4時水面が白々と明け始めた、水はや々濁っており底は見えない、あまり気持ちのいいものでない、しかも川幅が広い慎重に舟を進めていった。すでに夜はすっかり明けてきている。付近の農家の人が牛乳を舟に差し入れてくれた。ウグイスの美声、まことにそう快な朝。第一関門（豊清水付近）の激流にさしかかる「おお波が高いぞ」漕ぐ手に力を入れ必死になって下った。音威子府橋まで何の変化もなく下った。橋下の石に腰をおろして朝食のおにぎりをほおぼる、雨が降ってきた川面を渡る風がいちだと冷たい、休む間もなく舟を漕ぐ、川幅が一段と狭い、両側にぐっと山がせまっている宗谷本線と国道が山に押し出されそうだ。「天塩日誌」から抽出した主要調査メモは…

①左モマナイ川ありユウベ（チョウザメ）群れをなし、5、6匹捕獲②トンベツホ（頓別坊）に宿営この地にて“仏法僧”の声を聞く③奇岩怪石立ち並び所々に凹穴割れ目あり、岩間に落ち、溺死者多し④一条の滝七段に落ち、高さ三百丈の絶壁あり⑤ウニンテブ（オニノヤガラ）ラウラウ（コウライテンナンショウ多く見られるアイヌが食料としていた～箴島（翻勝）に上陸古老の一人長尾スエ（76才）をたずねた、スエさんは明治44年この地に来そうだ、“仏法僧”については、鳴き声は非常に美しく、一種の哀調さえ帯び「かあさん、かあさん」というように鳴き現在でもこのあたりに生息している。（（註）ハクであることが鳥類学者の我によって確認され昭和38年刊「日本野鳥図鑑」で修正されている）七段の滝は七ヶ所ほど絶壁から天塩川に小川が注いでいるのをみたが、おそらくこれが滝の痕跡をとどめる姿ではなかろうか。箴島を過ぎ最大の難所である激流にさしかかる急流帯は百m足らずだが、水深8m以上あり大きくぐらつきながら二舟巧みに乗り切った。サアベシナイ川（佐久）付近でオニノヤガラ等採集したく家をたずねた山の方へ行くあるとのことで確認して一日目の予定地まめ力強く漕ぐ、中川瀬尾橋午後4時30分着～夕食後佐々木与助さん（87才）をたずね、チョウザメの話聞く、「1914年（大正3年）夏の日舟を漕いでいると、大きな魚の群れが押し寄せてた、一軒7、8尺もあるサメが激しい勢でのぼっていく、急に恐ろしくなりほうほうので家に逃げ帰った」という。昭和の初めごろからほとんど姿を見ることができないという。「おそらくどこか深みにいるのではないかのう……」佐々木老人は言った。

一夜の夢を結んだわれわれは、疲れからぐっすり寝込んだものの、波打ちぎわのこのぶし大の石原に床をとったため、体のあちこちが痛い。

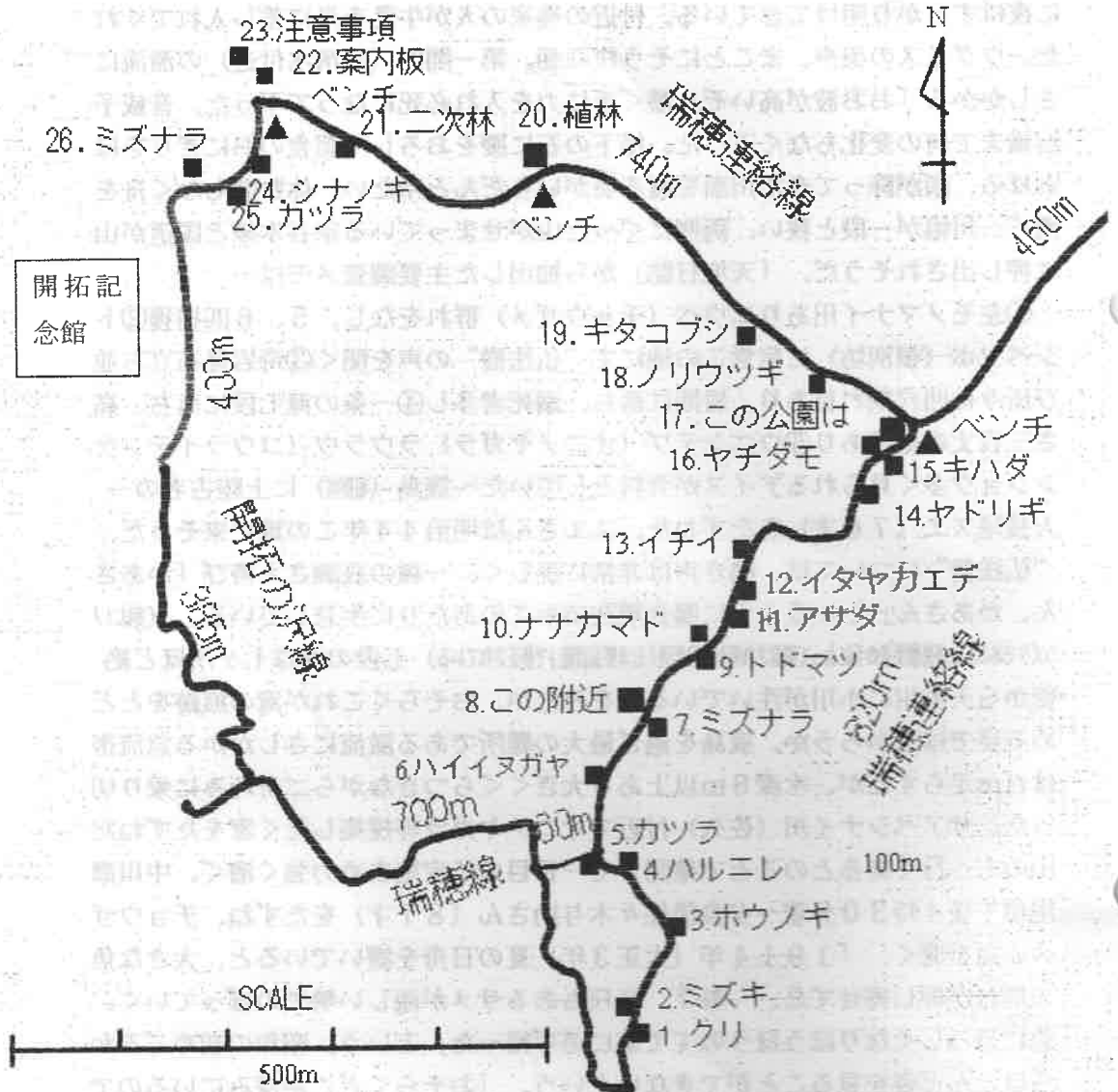
きのうの雨は、われわれに、平地での宿泊を許してはくれなかった。もとより、試練を覚悟の探険であれば、これも貴重な経験の一つであろう。

野幌森林公園を知る（2）

厚別区 室野文男

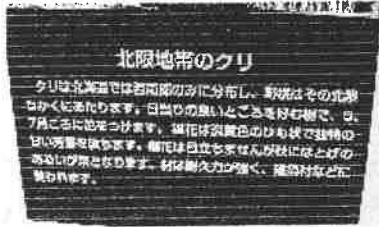
野幌森林公園に設置されている解説板の位置（瑞穂連絡線）を図面へ表示しました。

地形は省略しました。縮尺は約1万分の1、概略測定できます。

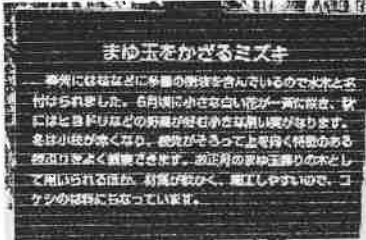


観察会で使用されるコースである開拓の沢線・瑞穂線は樹名版が設置されている。

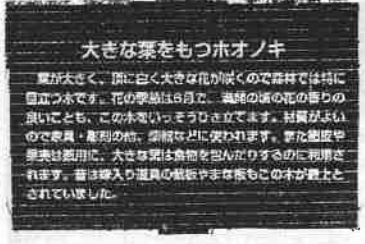
①北限地帯のクリ



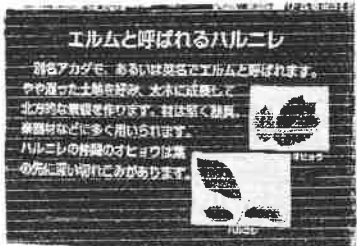
②まゆ玉をかざるミズキ



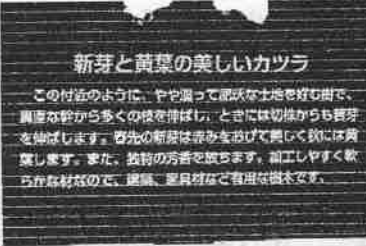
③大きな葉をもつホオノキ



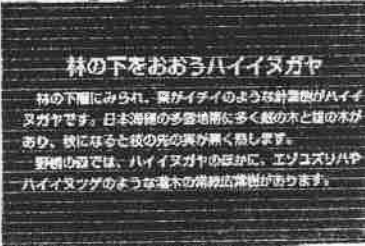
④エルムと呼ばれるハルニレ



⑤新芽と黄葉の美しいカツラ



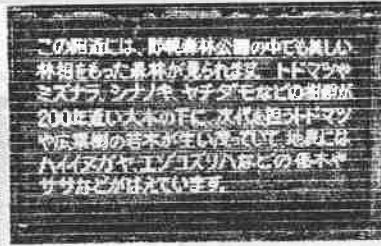
⑥林の下をおおうハイヌガヤ



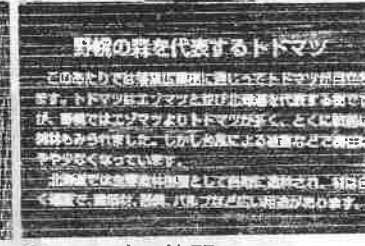
⑦ドングリがなるミズナラ



⑧この附近には、



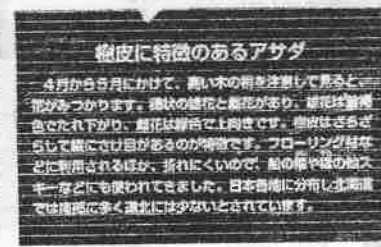
⑨野幌の森を代表するトドマツ



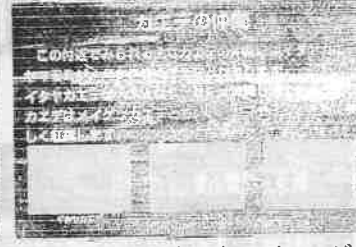
⑩紅葉の美しいナナカマド



⑪樹皮に特徴のあるアサダ



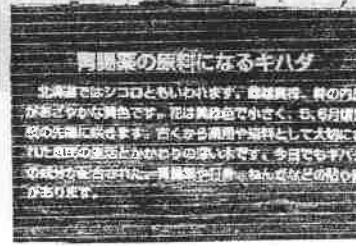
⑫カエデの仲間



⑬風格のあるイチイ



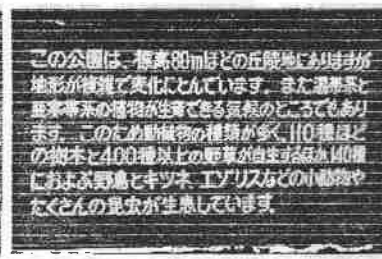
⑭幸運をもたらすというヤドリギ ⑮胃腸薬の原料になるキハダ



⑯湿地を好むヤチダモ



⑰この公園は



⑱サビタとも愛称されるノリウツギ



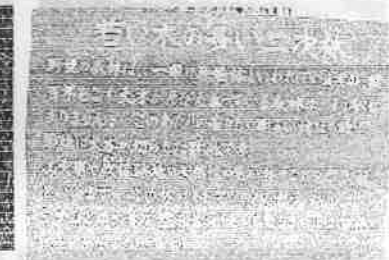
19.花が多いと豊作だというキタコブシ



20.植林（人工林）



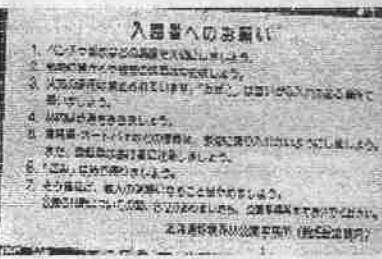
21.若い木が多い二次林



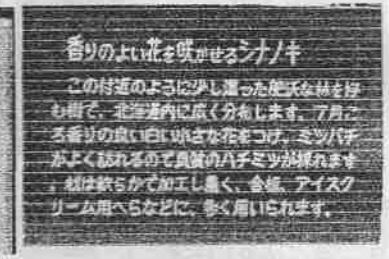
22.公園案内図



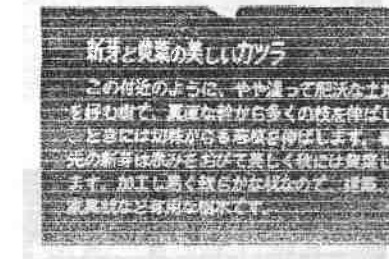
23.入園者へのお願い



24.香りのよい花を咲かせるシナノキ



25.新芽と黄葉の美しいカツラ



26.ドングリがなるミズナラ



記紀の中の植物(面白い話)

成田 伸一

記紀とは、古事記、日本書記を並列の呼称で、古事記は712年に成立した古代の歴史書で、三巻より始まり、上表文(序文)があり、本文は上巻(神代巻)、中巻(神武天皇から応神天皇まで)、下巻(仁徳天皇から推古天皇まで)からなる。全文が漢字で書かれるが、文体は和文読みである。

天武天皇が当時諸家に伝わる『帝紀』(天皇の系譜)と『旧辞』(神話伝説等)が真実と異なって誤りや乱れが甚だしいのを憂い、国家組織の根本、天皇政治の基礎を明らかにしようとして、稗田阿礼(ヒエダノアレ)に『帝紀』『旧辞』を暗唱させたが完成せず711年、元明天皇より詔を受け、太安万侶(オオノヤスマロ)が、阿礼の暗唱したものを撰録し、翌年の正月に文献としてまとめて進上したもので、上巻は神話で、天地や自然、国上、神々がいかにして生成し、国家の形成がどのように行なわれたかを説話的に記述している。

中巻、下巻は人代で神武天皇から始まる国内の平定、国土経営、政治機構等の他仁徳天皇の仁政、皇后の石之日売(イワノヒメ)の嫉妬物語、軽太子と軽太郎女(カルノオオイラツメ)別名衣通王(ソトオリノミコ)との悲恋物語の様な叙情的な記述もあります。

日本書記は、日本最初の勅撰の歴史書で六国史の第一。

文体は漢文で、舍人親王(トネリシンノウ)等が編纂にあたり720年に完成した。全30巻で、本来は別に系図一卷があったことが知られている。

天地開びやくの神話から、『帝紀』、『旧辞』を基幹として皇室や朝廷の歴史を物語る点は古事記と同様だが、記述の範囲が一世紀近くのばしています。神代の二巻以外は、持統天皇まで記事を総て年月日ごとに書く編年体の歴史書風な体裁をとり、神代の巻が古事記と異なる点は、多くの資料を引用していることで、天地開びやくの神話で、古事記が葦牙(アシカビ)の萌えあがるものによって天地が出来たとするのに対し、重いものが地に、軽いものが天になったとし、「またある一書に」として古事記の記述も掲載しています。

前述が長くなりいよいよ本題に取り掛かるとして、前述中の古事記の中に葦牙(アシカビ)とありますので葦、*Phragmites communis*(フラグミテス境または垣根コミュニス普通)イネ科の大形多年草本で、記紀によれば古代日本は「豊葦原瑞穂国」(トヨアシハラノミズホノクニ)または「豊葦原中国」(トヨアシハラノナカツクニ)などと表現されています。現在の様に日本の呼称は、大化の改新645年以降です。

アシの語源は数説ありますが、古事記の始めにある「国稚くし浮き脂の如く

して、久羅下（クラゲ）なすただよへる時に、葦牙（アシカビ）のごと萌え騰る物に困りて成れる神の名は字摩志阿斯訶備比古遲神（ウマシアシカビヒコチノカミ）」とあり、これより和訓抄には「葦は初めての義なりといえり、開びやくの初め、まず生じたものは葦なり。よて此国を葦原中国というなり」とあり、日本釈名にも「あしははし也、はじめ也」とあり、和漢三才図会に蘆、和名阿之、青しの和訓なり、葦、俗に与之と云う、弱しの和訓中略」とあり、難波の国、大阪は昔からアシの多い土地で知られ「アシは御足に通ずる」として商都を代表する植物として大阪府の花に指定されています。

後世になって、アシは「悪し」に通じるとして縁起をかつぎ反対語のヨシ（良し）とし現在の植物分類学では、標準和名はヨシ、万葉時代にはまだヨシの語はなく、アシ、阿之、と呼び、漢字では葎、蘆、葦と書きこれらの字が現在にまでおよんでいます。

アシを芦と書きますが、芦は蘆の俗字でもなんでもなく、和字だそうです。本草綱目に「葦のはじめて生ずる（すなわち初生のもの）を葎（カ）といい、いまだ秀でざる（中くらいのもの）を蘆（ロ）といい、長成する（長大に生育したもの）を葦（イ）という。葦は偉大を意味し、蘆は色の蘆黒を意味し、葎は嘉美を意味する」と、これら三語の意義と用い方について解説しています。

草の名も所によりてかはるなり難波のあしも伊勢のはまおぎ 救済
異名同物の例でアシは伊勢地方では、はまおぎと呼ばれていることがわかります。春に、アシは地中に長い地下茎の節より芽をだしますが、この新芽が食用にされ、アシヅノ、アシカビ、アシワカ、アシノツメと呼んでいた様です。また、秋には花穂をつけ銀白色の景観を作り、秋の風情が身にしみますが、しかし枕草子では、「あしの花さらに見どころなけれど、みてぐらなどいわれたる」とあり、作者の才媛清少納言にはあまり気に入らなかったようですが、徳富健次郎氏は、随筆「自然と人生」の冒頭で、「あしの花はさらに見どころともなくと清少納言は書きぬ。しかしその見どころなきを余は却って愛するなり」と書き、雅号を蘆花としています。

花が終わって結実すると付属している白い絹毛を蘆雪、蘆じよ、または俗にアシワタ、稲綿と呼び、昔は蚕綿を着用できない人々は、麻布にアシ綿やガマ、ゼンマイの穂綿を着用し、寝具にはこのほか、オギ、ススキ等の穂も用い、木綿が一般に普及する四百年前頃迄は、この様な穂綿を利用していたのが普通であった様です。

端午の節句の茅（チガヤ）は元来茅で巻いた茅巻（チガヤマキ）から出た名称だが、後に笹を主とし、マコモやアシの葉でも作られる様になった。

アシの稈の中空に薄い膜がありこれを鼓膜の代用として耳の治療にも近年迄利

用された。

ギリシア神話の中で、山羊の足をもつ牧神パーンが月の女神アルテミスに仕えるシューリンクスを追いかけて、もう一息というところでシューリンクスは河の神の父に助けを求めアシに変身したとき妙なる音がし、パーンは葦笛を作りこれが後のパイプオルガンの元となり、フランスの叙情派の詩人マラルメが詩を書き、これに感動したドビュシーが作曲したものが、単独で演奏されている「牧神の午後への前奏曲」です。

また、パーンは大声であったため戦場で威嚇の声を上げると、敵の軍勢が混乱したとされ、これがパニックの元とされている様です。

シューリンクスの変身したアシは株立となり生育する様子から、札幌の花のライラックが、根脇より萌芽が出る様子より、学名で属名が、シュリンガーとなっています。稈の中に膜があり、共鳴して音色がいいので、中国では蘆笛、日本では神楽に使用するしょう、横笛等があり、燃料に、建築材料、屋根ふき、垣根、前述の様に食料にと、生活必需品として貴重な役割を果たしてきた植物であると共に、最近また水の浄化作用にと環境対策に注目されつつある様です。

以上の経過より見た限りでは、わが国日本で最初に公式に文書に記載された植物はアシであると思われます。

しかし、一部の考古学では、古事記、日本書記の記載に「葦牙（アシカビ）然（状）」とありアシの様なものとして考える時、形状的に類似性の「ガマ」ではないかとの意見もある様で、植物学が確立されていなかった当時では、無理もない判断かも知れません。

次回は「ガマ」面白くなりそう。図鑑にない観察会をめざして頑張ろう。



コケを訪ねて

札幌市 吉田 政徳

子どもの頃、倒れた木の上に生えている緑の小さな植物が、あたりの植物と違った雰囲気をもっているように感じ、何か不思議な世界に居るような気がしました。これがコケ植物を見た最初の光景です。この可憐な植物も時の流れとともに、記憶の片隅に押しやられてしまいました。

自然観察会に参加していると、懐かしいコケたちに出会うことがあり、子どもの頃に見た光景が蘇みがえてきます。ところが、どうしてもコケたちのそばに近寄れず、横目にしながらその場を通り過ぎてしまうのです。目に触れる機会がありながら、それに感動しても、その名前を知らないばかりに、コケに目を注ぐことができませんでした。詳しく知りたいと思いながら、それをひもとく手がかりもなく時間だけが過ぎ、半ば諦めかけていたとき、書店で一冊の図鑑が目にとまりました。それは、ポケットサイズの『フィールド図鑑コケ』です。その序文の中で著者の井上浩氏は「……コケ植物の種を観察する場合、ルーペ程度で観察できる範囲にとどめてあるので……」と書いてありました。これを読み、コケ植物はルーペ程度で観察できるという喜びと期待が一度に沸いてきました。早速、屋外に出ると、建物の壁の下、道路沿いのコンクリート、庭石の凹みなどにいろいろなコケを見ることができました。

コケは他の植物にくらべ体が小さく、人目につきにくいものですが、ひそかにたくましく生きている彼らの姿に近づきたいと思い、身近な所から訪ねて見ることにしました。

参考図書	日本野生植物 コケ	平凡社
	日本原色蘚苔類図鑑	保育社
	フィールド図鑑コケ	東海大学出版部
	牧野新日本植物図鑑	北隆館

使用したルーペ 30倍

観察フィールド 野幌森林公園、西岡公園、その他各道路沿い

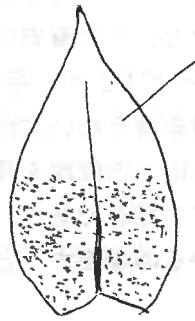
ギンゴケ (ハリガネゴケ科)

人家近くの地面、コンクリートの上などに灰緑色の集まりをなしています。

葉の形は卵形をし、上半分は透明です。上半分は葉緑素がなく乾くと白く見えます。葉の中すじ(中肋)は葉先近くまで伸びています。ふれあい交流館玄

関右側に見られます。
上半分が透明なこと
から銀ゴケと名づけ
られたそうです。

次の訪問先はエゾ
スナゴケ、ジャゴケ、
コツボゴケです。



透明

茎は高さ1cm内外
葉は重なり合っつく
葉の長さは1mm位

葉

◇ ◇本の紹介 岩崎元郎著「新日本百名山」(山と溪谷社) ◇◇
岩崎氏は、私たちの冬のフィールドになっている藻岩山を「新百名山」に
広報部

私たちの会は長い間、冬の藻岩山を登山観察会の場として取り組んできました。
今冬、2月25日(日)登山観察会が行われ会員7人一般参加者6人が参加した。私も前日の下見登山に参加し、その時の参加者は11名で、静寂な白い世界に青空が広がり、頂上からは街が俯瞰でき楽しかった。

中高年の登山を牽引する岩崎氏が、札幌市民が親しんでいるこの藻岩山を新百名山にあげていることはとてもうれしい。岩崎氏は、この山の他に北海道の山から礼文岳、利尻山、雌阿寒岳、大雪山、羊蹄山、恵山など7つの山々をあげている。

今日では、中高年の登山がブームになって、自分の体力も考えずに無謀な行動をする人も増えて事故も多くなってきた。そこで本来の登山の楽しみを味わってもらうために「新百名山」を提案している。中高年の人は体力も低下してきているので、山の高さを低くすることによって事故を防止できる、このことを根拠としてあげている。その上、47都道府県から少なくとも一つの山を必ず入れることをコンセプトにしている。結果として52山は深田久弥氏があげた「百名山」と一致し、日本を代表する山々も入っているそうである。

深田氏があげた百名山の中に入っている北海道の山々をあげてみると、利尻岳、羅臼岳、斜里岳、阿寒岳、大雪山、トムラウシ、十勝岳、幌尻岳、後方羊蹄山、など9つの山々である。深田氏の「百名山」は今日でも人気があって、その完全踏破をめざしている人がかなり多い。本格的登山をめざしている人には、深田百名山の方が魅力にとんでいるように思うが、過剰利用(オーバーユース)にもなって問題も多く指摘されてきている。

彼のコンセプトは、山の品格、山の歴史(昔からの人々の出会い)、個性のある山、などをあげ、付加条件として山の高さ1500m以上をあげている。「山高

きもって尊しとせずのだが」とも記してもいるが。

岩崎氏のこの著作は、地図、コース、そして交通アクセスがわかりやすく書かれている。地元の専門家も協力し、この藻岩山のコース紹介は花の写真家梅沢俊氏が執筆している。なんとといってもこの山岳書の魅力は、最初のところに400字程度の短文で、その山の特徴を飾らない文体で親しみこめて書かれていることである。それぞれの個性ある山々の解説を読むだけでも楽しい。登ってみたい誘引にかられる。私はとっても好きである。

そこで、藻岩山に書かれているのを記すことにする。

札幌市のシンボル、市民のオアシス

多くの人に山登りを始めてもらいたい、山登りの楽しさを実感してもらいたいと思って新百名山に選んだのが、藻岩山だ。藻岩山は豊平川を隔てて札幌市街の南西に位置する。街から近いこともあり、札幌市のシンボリックな山であり、そして市民の憩いの場となっている。こうした山をもてる市民は幸せだ。ぜひ、身近な山から登山を始めてもらいたい。

藻岩山には「モイワ」という名のつく動植物が多数あることに誰もが驚くだろう。とくに、東面、北面に原生に近い森が残り、範囲こそ小さいものの樹種が多いことで知られている。この天然記念物に指定された豊かな森には貴重な動植物が多い。

植物では、モイワボダイジュ、モイワナズナ、モイワシャジン、モイワラン、昆虫ではモイワサナエ、モイワヒメバチ、モイワガガンボなどが見られる。

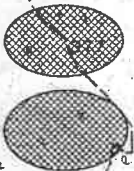
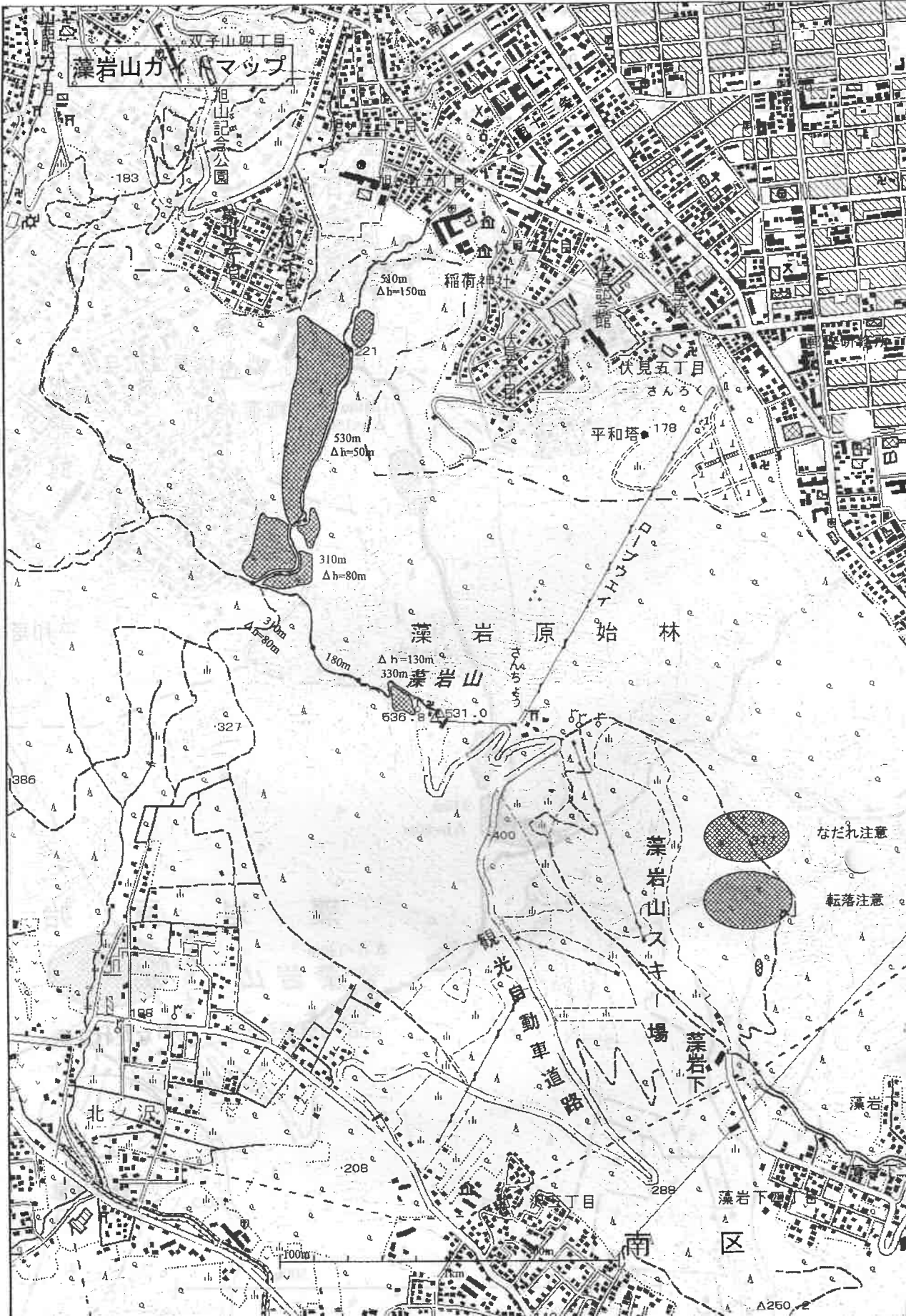
山頂眼下には札幌の街が広がり、遠く夕張や日高、大雪の山々も見渡せ、清々しい気分になる。

下巻の巻末には登山踏査の記録が掲載されている。

それにしても、2005年一年間で、彼が提案している「新百名山」のすべての山々を踏破されたことには驚かされる。



藻岩山カヌーマップ



なだれ注意

転落注意

藻岩山ガイドマップ



会の継続と発展を願って

春日 順雄

北海道ボランティア・レンジャー協議会（以下、ボラレンと表記）が発足して20年、これまでの継続と発展を支えた先達の皆様のご労苦に謝意を表します。

育成研修会との二人三脚

20年間にわたる継続は、人から人への伝達、先輩から後輩への伝達という現象があって成立したことです。人は老いるもの。会の存続には人の更新が必要です。新しい会員の入会が必要です。

会則第6条の1項でいわく「この会の会員はボランティア・レンジャー育成研修会（以下、育成研修会と表記）の受講者で年会費を納入したものとす。」と。ボラレンが20年間継続できたのは、20年間にわたって育成研修会が開催されたから。ボラレン会員が全道にまたがっていることと、地方支部も存在することは、育成研修会が全道各地で開催されてきた成果でありましょう。ですから、育成研修会の開催が継続することは、ボラレンの継続と発展には欠くことはできないことです。

会務執行の律儀さ

会則には、会員の条件として、「年会費を納入した者とする」とあります。ボラレンの会計事務の執行担当者は、会費納入と名簿管理の仕事をきわめて律儀に進めております。会費納入率は100%に近い素晴らしいことです。会員の律儀さと会計事務執行を含む全ての会務執行の律儀さの継続は今後にとっても大切なことです。

広報活動の大切さ

会員が心を寄せ合い一体感を感じるということについてですが、広報「エゾマツ」の果たす役割が大きいと思います。全道に展開する会員の心をつなぐものです。嬉しいことに、会員からの投稿原稿が多いと聞きます。会員の心をつなぐ広報活動は会の発展に欠くことはできないことです。

自然観察会はボラレンの目的遂行の中核

ボラレンの目的について、会則第2条でいわく「会員の自然観察及び自然保護に関する意識の高揚を図り、自然解説等を通じて自然保護思想の普及啓発に努め…」と。会員の研修と社会への普及啓発活動の中核は自然観察会です。

自然観察会の場合は、参加者と案内人と観察対象としての自然現象によって成り立ちます。

一般参加者が沢山集まることは、ボラレンの目的達成の機会とボラレンの存在感を知って頂く機会の広がりです。ですから、観察会開催のお知らせは、今まで同様、様々なメディアの協力を得ての創意と工夫をこらした精力的な取り組みが必要です。

次に、自然観察会参加のボラレン会員についてです。観察会に必要なボラレン会員の確保と会員の研修と継承という視点で述べてみます。

稀に一般参加者がいっぱいなのに案内役が少ないということがありました。ボラレン参加者数の事前把握は必要なことでありましょう。当日の参加者把握は前日に、不足の場合は対応する態勢が必要です。観察会結果の記録化などを含めてシステマ的な取り組みの必要性を感じる領域です。また、案内者としてのボラレン会員の高齢化現象がみられます。これは、あと5年もすると切実な問題になるかもしれません。

観察会は、会員にとっての研修の場でもあります。前日の下見は、コース全体を把握しながらもテーマをもったものにした方がいい。観察会当日は、人数に余裕があるときは、「ボラレン仲間に学ぶと」という視点から、フリー参加もあっていい等、多様さがあっていいかもしれません。

自然観察NOW

野幌森林公園自然情報

2006.11.12 No.7

北海道ボランティア・レンジャー協議会

冬を越す草本

まもなく雪の季節になります。すっかり葉を落とした落葉広葉樹は寒い雪の季節に備え、しっかりと冬芽を形成しています。草本の仲間はずっと枯れていますが、よく見ると冬越しの備えをしている姿もあります。例えば「ロゼット」と呼ばれる草の姿です。

ロゼットとは地上茎がほとんどなく、葉はすべて根ぎわからでます。この葉を「根生葉」といいますが、この根生葉が集中してつき放射状に見える形をロゼットといい、バラの模様のローズからきた言葉です。地面に張り付いたような形は冬の寒風を避けたり、晩秋の弱い太陽をできるだけ受け止めるためだと言われています。このような姿の植物を「ロゼット植物」とも呼ばれています。野幌森林公園内の道端に目をやるとセイヨウタンポポ、オオバコ、ヒメジオン、アザミの仲間など、結構ロゼット植物が観察できます。

植物では種子から発芽～成長～開花～結実し、一生を終えるまでの過程を「生活史」といいますが、冬をまたぐ生活史を持つ草本には「越年草」と「多年草」があります。

●越年草

秋に発芽し、冬の間は小さな背丈やロゼットの姿で春からの成長に備え、その後開花・結実を果たす草本。

- ・冬型1年草（秋から翌年春～夏ごろまでの生活史を持つ）
- ・2年草（満1年以上、2～3年に及ぶ生活史を持つ）

●多年草

何年か冬をやり過ごせる。根の部分だけで越冬するものも多く、園芸種では宿根草と呼ばれる。

- ・多年生草本（個体の寿命が3年以上ある草本。地上部や地下部の寿命や交代の仕方はいろいろある）

この時期、冬の寒さや積雪という悪条件をどのように克服しようとしているかという視点から観察してみると、したたかに生きている越年草や多年草のたくましい姿に心をうたれます。そして、ロゼットを作らないものや、まったく目立たないもの等々の冬越しの姿を探してみるのも晩秋の観察会のおもしろさかも知れません。



着生植物

—着生シダ—

葉の落ちた木々を観察すると幹や枝に、色々なものが付いています。コケ類や地衣類、そしてシダ類も付着しています。これらの仲間を「着生植物」といいます。

着生植物とは、土壤に根を下ろさず、他の木の上、あるいは岩盤などに根を張って生活する植物です。寄生植物（ヤドリギなど）と間違えられることがありますが、くっついている植物から栄養を吸収しているわけでないので全く異なるものです。

コケ類には非常に多くの着生生活のものがあり、むしろ地上性のものよりおおいくらいですし、地衣類はほとんどが着生生活です。

シダ類では、野幌森林公園内で今の時期、次の3種が観察できます。葉の落ちた樹木の幹や枝を丹念にみてみましょう。

●オシャグジデンド

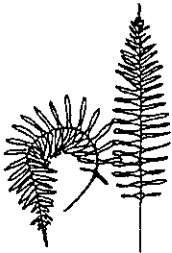
夏に落葉して、秋に新葉が開き、冬は緑の葉が残ります。乾燥標本にするとゼンマイ巻になります。北海道から九州まで分布します。

●イワオモダカ

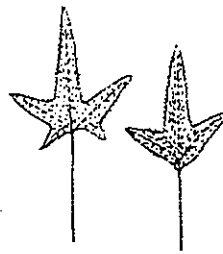
常緑性で、葉裏は褐色で星状毛が密生しています。葉身は3～7裂することがあります。

●ホテイシダ

葉はやわらかく、先端はしばしば尾状になる。緑夏性です。



オシャグジデンド



イワオモダカ



ホテイシダ

初 雪

今年の気温は高めに経過しているためか、札幌では初雪が観測されていませんが、まもなく雪が降ることでしょう。初雪とは「降雪が地上に落下し（観測場所の地面の半分以上を雪で覆った状態）が最初に見られる日」と定義されています。

気象庁の気象官署80地点に観測場所があり、全国の降雪に関するデータが蓄積されています。札幌の初雪の平均日は10月28日ですが、1880年には10月5日の記録もあります。

根 雪

11月中旬頃から降りはじめた雪が12月になると解けない状況になり、これをいわゆる根雪という言葉を使っていますが、気象用語では「長期積雪」といいます。

長期積雪とは「積雪継続の長さが30日以上にわたる時、その初日から終日までの期間」と定義されています。ただし、10日以上積雪の続く期間が二つ以上ある時は、その間の積雪のない日が5日以内ならば前後の積雪は継続したものとみなして、そういう場合は根雪期間として計算されています。

平成18年度

北海道ボランティア・レンジャー協議会第4回役員会

日時：平成19年4月10日（火） 18：30～

場所：札幌エルプラザ会議コーナー

役員会次第

I.開会

II.会長挨拶

III.連絡・報告事項

1.総務部

2.研修部 ・2月25日 藻岩山登山観察会 ボラレン会員7名、一般6名

3.広報部 ・「エゾマツ」80号の発行

4.事務局

- (1) NPO法人・札幌観光ガイド社について スポンサーの協力を得て、今後は札幌市はもとより全道各地の公園に「樹名板」を取り付けたい。その際、樹木名の確定のためにボラレンの協力を得たいということであった。しかし、スポンサー探しをしたが、見つからなかった。札幌観光ガイド社の仕事を閉じるということになった。
- (2) 総会の会場について 申し込みの先陣争いに負けました。エルプラザは使用不能。手狭ですが、今まで通り「環境サポートセンター」で行います。場所が引っ越ししていますから、要注意。

※ 北海道環境サポートセンター 中央区北4条西4丁目 伊藤・加藤ビル4F

- (3) 総会に先立っての研修の講師は、石川 清氏（北海道漁業環境保全対策本部 研究室々長）
演題は「漁業からみた水環境」

- (4) 3月14日（水）14：00から 19年度へのソフトランディング 場所：自然ふれあい交流館
道の自然環境課 主管 今村 衛 ・ 主査 小森節子
野幌森林公園事務所 公園利用課長 野口 光紀・主任、藤本 剛・濱本 真琴
北海道開拓の村 学芸課長 山田 健・企画普及課主事 松井 則彰・他1名
ボラレン 田村会長・春日
・ 指定管理者は「北海道開拓の村」
・ 今後、この体制は、3年間継続する。3年間かけて、どう構築していくのが課題
・ 育成研修会は、「北海道開拓の村」が引き継ぐ。開催場所は、「自然ふれあい交流館」
・ 講師については、今後連絡しあう。ボラレンからの講師派遣が考えられる。
・ 受講証の名前は、今後、連絡しあう
・ 実践セミナーの開催は不明。今後、開催、講師の派遣を含めて、相談しあう。
・ 野幌に於ける自然観察会の開催は従来通り。開催周知の方法が広範囲にわたるので今後参加者が増えるかも。

- (5) フィールドガイド編集委員会

IV.協議事項

1. フラワーソンのとりくみ

- ・期日：6月16日（土）と17日（日）の二日間
- ・4月30日までに申し込む

2.平成19年度 第22回定例総会について

(1) 総会次第について

① 研修会の進行者

② 定期総会の分担

- ・全体進行（ ） ・来賓紹介（ ）
- ・議長（ ） ・議事録署名人（ ）
- ・記録（ ） ・決算報告と予算案（ ）
- ・監査報告（ ） ・監査日の設定（ ）

(2) 1号議案について

① 平成18年度事業報告

- ・観察会事業 ・研修会事業 ・他団体への協力派遣事業
- ・広報誌「エゾマツ」 ・会議 ・道との関わり
- ・その他の活動

② 平成18年度収支決算書

(3) 2号議案について

① 北海道ボランティア・レンジャー協議会20周年記念事業

- ・記念会員写真展 ・記念会員研修会 ・記念講演会
- ・「エゾマツ」20周年記念特別号 ・フィールドガイド作成

② 20周年記念事業の準備作業

③ 20周年記念事業会計中間報告

(4) 3号議案について

① 平成19年度事業計画案

② 平成19年度観察会・研修会予定案

③ 平成19年度予算案

3.総会後の懇親会について

4.9月までの観察会・研修会の当番について

V.その他

1.19年度第1回役員会

5月14日（月）

午後6時半～

札幌エルプラザ会議コーナー

VI.閉会

小樽支部観察会 (06年集計表)

観察会名	実施日	参加人数	備考
1 オタモイー赤岩山	4月30日(日)	42人(35,7)	道新取材
2 春香山	5月27日(土)	25人(18,7)	
3 定山溪天狗岳	6月22日(木)	20人(16,4)	バス
4 富良野岳	7月12日(水)	21人(18,3)	バス
5 オコパチ山ー穴滝	7月22日(土)	15人(11,4)	
6 塩谷丸山ー最上町	9月16日(土)	28人(24,4)	キノコ
7 風不死山	10月20日(金)	22人(16,6)	バス
8 小樽市有林内	11月11日(土)	23人(18,5)	納会
9 天狗山東斜面	2月18日(土)	13人(7,6)	
10 天狗山ーオコパチ川	3月25日(土)	11人(9,2)	道新取材

- ・ 参加者、前半は一般参加者、後半は会員
- ・ 参加総数は220名 一般参加者は172名 会員は48人



次回、夏季号の原稿の締め切り

6月15日

- ・ B5版で、ページは1または2枚程度で
- ・ カラー写真を入れたりして紙面を充実させていきたい。
- ・ 会員の皆さんの投稿を待っている。

2007年小樽支部自然観察会予定表
(北海道ボランティアレンジャー協議会・小樽支部)

No.	月/日(曜日)	行き先	見どころ	集合場所・時間(担当リーダー)
1	4/28(土)	オタモイ～赤岩山、	春植物	路線バスオタモイ入り口下車、9時 (北原)
2	5/5(土)	塩谷丸山、	初夏の植物	JR、塩谷丸山駅前駐車場、8時30分、 (大川)
3	5/16(水)	濃昼山道、(厚田、浜益)	古道の景観	貸切バス、小樽駅向かい、第三ビル前、バス停付近へ、6時まで、 (松原)
4	6/2(土)	穴滝とその周辺	ミズバショウ	天神浄水場(奥沢水源地向かい)、9時、 (魚野)
5	7/20(金)	原始ヶ原から富良野岳	高山植物	貸切バス、小樽駅向かい第三ビル前、バス停付近4時、 (一鉄)
6	9/5(水)	徳舜瞥山、(ホロホロ山)	野草、	貸切バス、小樽駅向かい第三ビル前バス停前、5時、 (魚野)
7	10/20(土)	自然の村～穴滝	紅葉、キノコ、	自然の村前駐車場9時(松原)
8	11/10(土)	小樽市有林内	カラマツ黄葉	路線バス商大線終点9時、 (大川)
9	2/23(土)	天狗山東斜面	カンジキ歩き	天狗山ゴンドラ乗り場9時30分、 (一鉄)
	3/22(土)	天狗山～オコバチ川、	カンジキ歩き	天狗山ゴンドラ乗り場9時30分、 (北原)

参考

- ①約1週間前、道新小樽版、読売金曜夕刊等に集合場所、時間等を再掲します
- ②天候外の都合で、日時等変更する事も有りますので事前に申し込み願います
- ③参加料は、1人300円、貸切バスは実費、当日受付で願います、
- ④自家用車の方はその旨連絡願います(駐車場の状況、乗り合わせの可否等)
- ⑤申し込み、問い合わせ等は、0134-27-1701、北原迄、

編集後記

- ・伊達の木村さんからは中心なって進めている観察会、平取の川村さんからは植物調査、それぞれの活動にもとづく貴重な報告をいただきました。川村さんは地道な調査を単独で行なっているようです。
- ・昨年の夏の研修会に参加されて加入してくれた剣淵町の梅坪さんから、春山での作業、樹木に親しみを込めたハルニレとの共振など興味や関心と呼びおこす内容の原稿をもらいました。
- ・積丹の佐藤久美子さんから、自分たちのかけがえのない郷土の山を想いながら、今回のスノーモービルの悲しい事故にふれられています。当然にも、山に入る人は十分な注意が必要です。私たちも山に登るときには、その土地で生活し郷土の山を大切に守り保護している人たちの想いも考えて行くようにしたい。
- ・千歳の宮本健市さんが入会されました。私は、開拓の村のボランティアに行っているので、宮本さんが会員のために行ってくれている自然観察会に2回参加しました。ていねいでわかりやすい解説から教えられていました。
- ・NOWは、会長の田村さんが野幌自然観察に参加される人たちに配布してくれている資料です。やや時期が遅れましたが、いい解説で参考になりますので掲載します。(S)

エゾマツ 2007年3月
29日発行
春季号 80

会長 田村 允郁